

## 〈追悼文〉中本正智さんのこと

小川, 徹

---

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

琉球の方言

(巻 / Volume)

18-19

(開始ページ / Start Page)

5

(終了ページ / End Page)

6

(発行年 / Year)

1995-02-24

# 中本正智さんのこと

小 川 徹

中本正智さんに始めて会ったのは昭和36年（1961）のことだったと思う。当時、東京大学に沖縄最初の言語学特別研究生として名嘉順一さんがいたが、中本さんはその第二陣として、この年、比嘉政夫さんと共に上京したのである。名嘉さんは翌年沖縄に帰るのだが、この三人が東京に勢揃いしたことも戦後における沖縄研究の勃興を告げる出来事だったといえよう。

その頃、戦時中の「協会」から学会組織に復帰を遂げた日本民族学会の活動家の間で、科学研究費の交付を受けて日本の親族組織を研究しようとする気運が高まっていた。関敬吾さんや蒲生正男さんあたりの発議ではなかったか、沖縄からの三人に話を聞こうという計画が実現した。何月であったか、また、どこであったか、比嘉政夫さんに聞くと、関さんのお宅だったように憶えているというが、私は駿河台のあたり、おそらくは明治大学の大学院の研究室ではなかったかと思う。当日の東京側の参加者の全容もいまとなっては定かではないのだが、三人の諸君と有意義な午後を過ごした記憶だけが残っている。

翌年、昭和37年（1962）には、また、東京都立大学の社会人類学教室を中心とする沖縄総合調査が実現した。余言ながら、今なら公言しても差支えあるまいが、当時沖縄は日本本土から分離され、国連の名の下にアメリカ軍政下に置かれており、いわば外国であったので、研究費行使上はすでに本土復帰を遂げていた奄美研究の名のもとにすべてが運用されたのである。団長は長老ながら元気一杯の古野清人先生、副団長も同教室の鈴木二郎さんであり、学外から佐々木高明さんに私、沖縄側からも比嘉政夫さんが正式に組織に加えられていた。その年の7月末日、一同はパスポートを携えて那覇に上陸し、各班に分かれて約1ヵ月の日程で調査に入った。

何かのことで来島できなくなった鈴木二郎さんの代りに、私が古野清人先生のお供していわゆる本部を称して、現地諸機関へあいさつと、各班の入村地を尋ねては調査のPRと協力を要請して廻った。その間、中本さんは郷里の島尻郡玉城村奥武の見学を手配して下さった。奥武の村は沖縄ウフヅに接する奥武の島上の海の匂いに満ちた集落であり、「オウ」という地名にも興味を抱いていたので、団長以下数名喜んで参上した。当時、村の生活協同組合の責任者であられたのは中本さんの長兄、正隆氏であり、われわれを実に心暖かく受け入れて下さり、村婦人会総出の大御馳走にも預ったのである。中本さんが海の生活語彙に終始深い興味をもたれたのは幼少時の生活環境からみて当然のことといえよう。法政大学沖縄文化研究所が1980年に刊行した『沖縄久米島における言語・文化・社会の総合的研究〈中間報告〉』

に収められた「ウミンチュの生活語彙」なる一文にその面目躍如たるものがある。

垣間みる限り、中本さんの勉強ぶりには感服させられるところが多かった。言語地理学は、高度に理論的武装を遂げ、組織的な集約調査に基づく分布論的分析によって、広域の言語現象の把握に成功しているが、中本さんもその代表的研究者の一人であったと思う。業績は数多いが、私見を敢てすれば『図説琉球語辞典』を挙げたい。とくに多くの語彙の分布図は圧巻である。たとえば351頁の「柱」をみると、語彙をパシラ、ファシラ、ハシラ、パラ、ファリヤー、ハリヤーの六系に分類し、その分布を三角、四角、丸の基本形の白黒で区別し、各区分内の微妙な語彙の二次的分岐を算用数字に和数字をも利用して細分して示す。奄美にはハシラ、ハメリヤーなどが多く、先島には与那国のフィラを例外としてパラ系が卓越するのに対して、沖縄地域では国頭にファリヤー、パラ系を中心とし、中南部ではハリヤー系が卓越することが直截に読み取れる。この分類表示の技法は多分中本さんの独創だろうが、並々ならぬ創意工夫の跡がみられることを高く評価したい。

多くの遺業を残したが、しかもなお多くの期待が空しく残された憾みが大きい。いまはなき中本さんを偲んで一言述べた次第である。

1994年 9 月20日

(法政大学沖縄文化研究所客員所員)



懇親会で得意のカチャーシを踊る